

ポンカイ・バル村の状況

2011年6月19日

弁護士 奥村 秀二

第1 はじめに

ポンカイ・バル村の状況については、2004年1月に調査を行った。その結果は、甲C2号証として提出済である。

上記調査の時は、アクションプランによるゴム苗木の植付から4年が経過したときで、まだゴムの生産はできていなかった。そこで上記調査から7年が経過した現在の、ゴムの生育状況やゴムの生産状況を確認するために、再度、ポンカイ・バル村のゴム園を調査した。

第2 調査の概要

今回行った調査の概要は以下の通りである。

- 1 2004年1月時の調査で、ゴム園の状況を確認したムダル（MUDAR AR）氏のゴム園の状況や実際のゴムの生産状況を確認するため、2010年12月31日、同氏からの聞取と、同氏のゴム園の現地確認を行った。
- 2 同村の全体的な状況について、ムダル氏と村議会議長であるマイリゾン（MAIRIZON）氏から聴取した。

第3 ムダル氏のゴム園の状況

1 ゴム園の現状

2010年12月31日現在の、同氏のゴム園の状況は下記写真の通りである。



【写真1】



【写真2】

上記写真1、2はゴムの採取を行っている木の前にムダル氏に立ってもらって写真撮影をしたものである。7年前に比べゴムの木も生育している。撮影場所・方向は別紙図面1の通りである（写真2と3はほぼ同じ位置で撮影方向が少し違っている）。



↑【写真3】

↓【写真4】



上記写真3、4は、ムダル氏のゴム園の北東端で南側と北側をそれぞれパノラマ撮影したものである。北側、南側ともゴムの木が成長していることがわかる。写真4で中程奥にオイルパームが写っているが、これはムダル氏ゴム園の北東側に位置するオイルパーム園のものである。

【写真5】



【写真6】



写真5, 6はムダル氏のゴム園の中心付近で、南西方向から北西方向にかけてと北西方向から北東方向にかけてをそれぞれ撮影したものである。いずれもゴムの木が生育しているところが写っている。なお、ゴムの木の中に低木で葉が茂っている木が植えられているが、これはカカオの木であり、幹にカカオの実がなっていた(写真7, 8)。



【写真7】



【写真8】

2 ムダル氏の説明

「2004年1月当時は、まだゴムの収穫ができない状況であったが、2006年頃から生育の良いゴムの木から収穫できるようになり、2008年頃にゴム園全体から収穫できるようになった、その頃からようやく普通に生活できるようになってきた。」

「2004年1月の時にインゲン豆、ピーナッツなどを作っていたパラウイジャ地は、今はアブラヤシを植えた。しかし、アブラヤシの方は、ゴムとは違い、最近、値段が下がっている。アブラヤシは肥料にお金がかかり、肥料を十分に用意できないと収穫量は落ち十分な収穫ができない。0.4haのパラウイジャ地ではさほど広くないのでたいした収穫にはならない。現在は、肥料を買って生産をあげることも、自分たちが食べていくことを優先しており、生産はさほど上がっていない。」

第4 ポンカイ・バル村の状況

ムダル氏の自宅にて、ムダル氏及びマイリゾン氏(現ポンカイ・バル村村議会議長)

より、ポンカイ・バル村の現在の状況を聴取したところ以下の通りであった。

- 1 まず、前回の調査の際、ポンカイ村から移転してきた世帯の内、3分の2ほどは村の外に出稼ぎに出ていると聞いていたので、その事情及びポンカイ・バル村のゴム園の売却状況を聞いた。



【写真9】(別紙図面2：ムダル氏自宅7年前と変わらない)

「1996年の移転時に、ポンカイ村から移転してきたのは200世帯であったが、現在では、その3分の1程度しか残っていない。3分の2は、ポンカイ・バル村では生活できないため村を出て行った。村を出てしまった人たちの多くは、村を出る際に、ゴム農園、パラウィジャ地、家を全部売ってしまっている。」

「移転後2年間ほどは生活扶助があったが、1998年頃にそれがなくなるとポンカイ・バル村では生計を立てる方法がなかったことが原因である。2000年にアクションプランが始まる前に村を出て行った人が大半だった。」

「村を出た人たちの多くは、マヤン・ポンカイやポンカイ・イスティコマの親戚や兄弟の所に移っていった。親族を頼らない人はプカンバルなどに行った。頼ることができる人がいない住民や、夫が出稼ぎをし、その間妻だけがこの村で暮らすということに耐えることができる人がこの村に残った。」

「外部からは、例えばジャワの人たちが土地一式を買って新たに移り住んきている。外から来た人たちの中には、アブラヤシを植えている人が多い。彼らは、資本を投入して肥料をやり管理をしており、生産を上げられている。」

- 2 外部者が経営しているという村内のアブラヤシ農園の様子

【写真10】



外部者が経営しているというアブラヤシ農園の案内を受け、写真撮影をした（写真 10, 11）。それぞれのおおよその撮影場所・方向は別紙図面 1 の通りである。 【写真 11】



3 次に、2004 年の調査時にポンカイ・バル村の水道の状況について、移転前には、2 世帯に 1 個の井戸と 4、5 世帯に 1 本、川から水を引く水道を設置すると聞いていたが、実際には再定住地には、井戸はあったものの水道はなく、村全体で川から水を引くようになっている貯水タンクが 8 個設置していただけであった上、水源の川はすぐに涸れてしまうような川で役に立たず、井戸もほとんどは乾期になれば涸れてしまい、結局、川まで歩いて水を汲みに行くしかない状況だと聞いていたので、その状況について確認した。

「水については状況は、以前と変わっておらず、乾期には井戸が涸れるので、約 7 km 離れたタビン村まで水を汲みに行く。車やバイクがないと水を汲みに行くのも困難な状況だ。そのため村人の中には、3 日か 4 日かマンディーをしない人もいる。」

「政府から支給された井戸で使えるものはない。政府の援助で井戸を建てたがちゃんとした井戸ではなかった。政府や PLN による井戸は 2004 年当時と同じものしかない。2000 年のアクションプランやそれ以降にも水道については何も話はない。」

「私（マイリゾン）は、業者に頼んで、掘削機で 140 m 掘ってもらい、汲み上げ井戸を作った。この井戸は乾期でも涸れない。私は、3 日、4 日もマンディができない人に『家でマンディーをしていけよ』と声をかけているが、汲み上げに電気がかかるので遠慮をしてしまう人が多い。こうした深井戸は政府や PLN は作らなかった。」

4 移転時に設置されていたという川から水を引く施設や貯水タンクの残骸が残っているとのことであったので、案内を受けた。

1 つは、マイリゾン氏の家の隣にあり、汲み上げ井戸の水をため場として利用しているとのことであった。写真 12 はそのタンクと横に設置された浴室・洗濯場を撮影した

ものである。

【写真 12】

マイリゾン氏の家の位置は別紙図面 2 に記載したとおりである。

写真でタンクの右下に移っている機械が井戸の汲み上げポンプである。そのポンプを近接して撮影したものが写真 13 である。



下に 140 m に及ぶ深井戸が掘削されているとのことであった

赴いたときにはポンプは作動していなかったが、タンクにためた水がなくなると作動させて水を汲み上げてタンクにためるようにしているとのことだった。



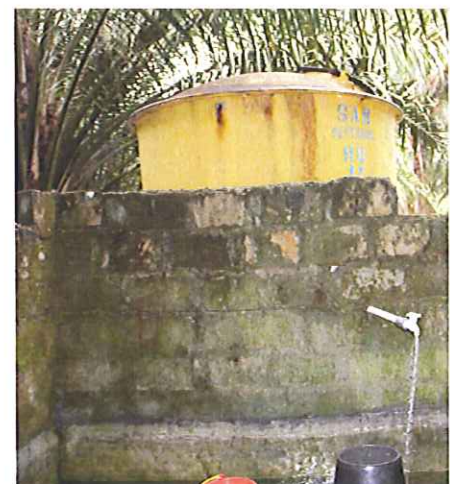
浴場の中はいるとタンクに接続された蛇口から水が出ており、実際にタンクに水が入っていることが確認できた。

↑ 【写真 13】

マイリゾン氏の家の近くには別のタンクもあった。

↓ 【写真 14】

↓ 【写真 15】



次に移転時の引水施設の案内を受けた。引水施設が存するおおよその場所は図面 3 に示したとおりである。

写真 17 は引水施設の門柱を撮影したものである。門中には「OECF VII」という記載があり（近接して撮影したものが写真 16）、OECF の援助により建造されたものであることを伺わせた。



↓【写真 17】

↑【写真 16】

この門中の奥にポンプ室、貯水タンク、沈殿設備が設置されており、これらを撮影したのが写真 18 から 20 で、写真 18 の中央に移っているスレート葺きの屋根の建物がポンプ室でありその右側に貯水タンクがあり、手前に撮影されている青色の建造物が沈殿設備である。



↑【写真 18】



↑【写真 19】

↓【写真 20】

写真 19 は貯水タンクと沈殿設備を撮影したものである。写真 20 は沈殿設備の全体を写したものである。左奥に見えるのがポンプ室である。

これらの状況から長期間作動していないことが明らかであった。



以上

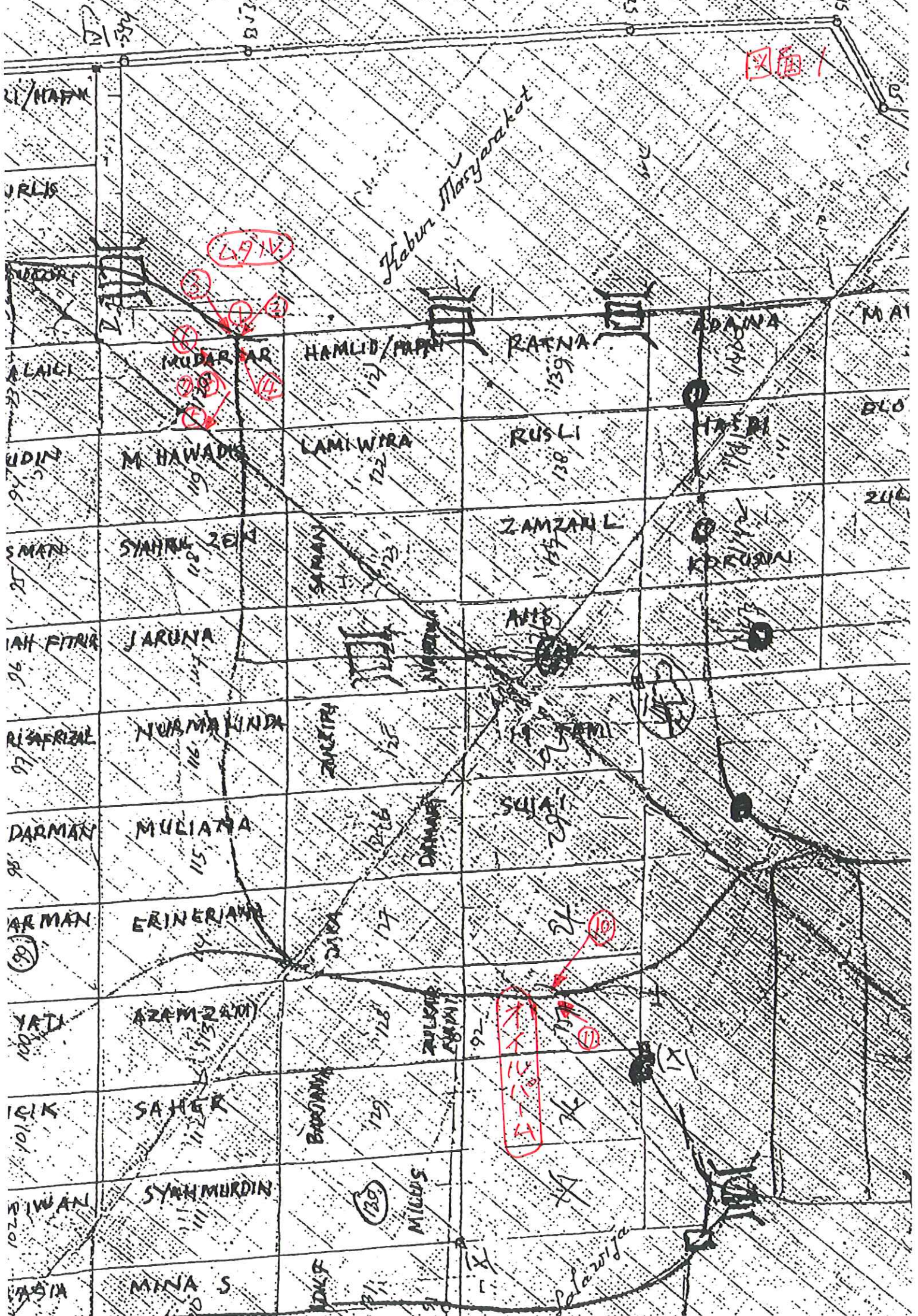
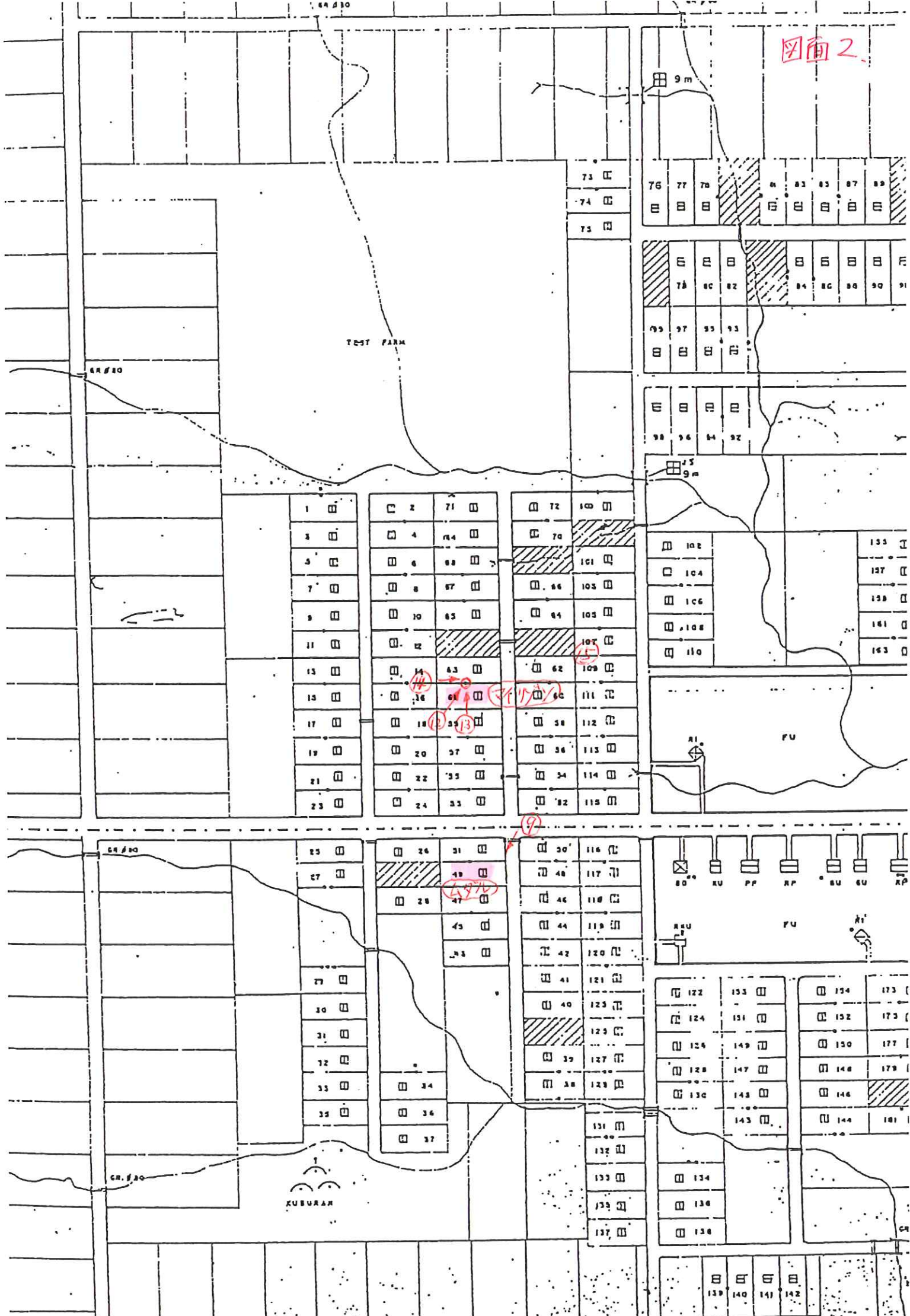


Figure 1

Hubun Masyarakat

Palawija

圖面 2





18 19 20 31水施設

Jl. PT Garuda
K. 6. 7. 20

Jalan Margasari
K. L. 2. 20. 25